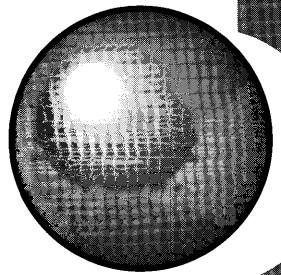


「ミュージアム・シティ・ヨコハマ」



検討メンバー 都筑区政推進課 米満東一郎 市民局区連絡調整課 田中礼子 環境事業局都筑工場 西宮節子 中区総務課 新谷雄一
 南区納税課担当係長 鬼木和浩 教育委員会青葉台小学校 田畑智子 教育委員会森の台小学校 鈴木 稔

その「まち」にしかない個性的な魅力を、住民誰もが知り、それを誇りに思っている。まちかどには趣向を凝らした展示がなされ、行き交う人を楽しませる。そんな「まち」を市民が自らつくる都市。それがミュージアム・シティ・ヨコハマ(以下MCY)である。

①ミュージアムに注目するー魅力ある地域づくりをめざしー

横浜が魅力的な都市であることは、多くの人が認めるところだろう。しかし、その魅力的なイメージは、「港、中華街、ハイカラ」など都心に偏り、都心部以外の住民の多くは、身近な地域の文化的・歴史的魅力を知らず、地域の魅力づくりに参加する機会も少ない。

当「MCYづくり」検討チーム(以下検討チーム)は、地域の魅力を発掘・発信するミュージアムを中心としたまちづくりと、それを人的・物的に支えるネットワークシステムの整備が、今後横浜にとって重要な政策となると考える。

②MCYをつくるために

MCYを形成する中心は市民を中

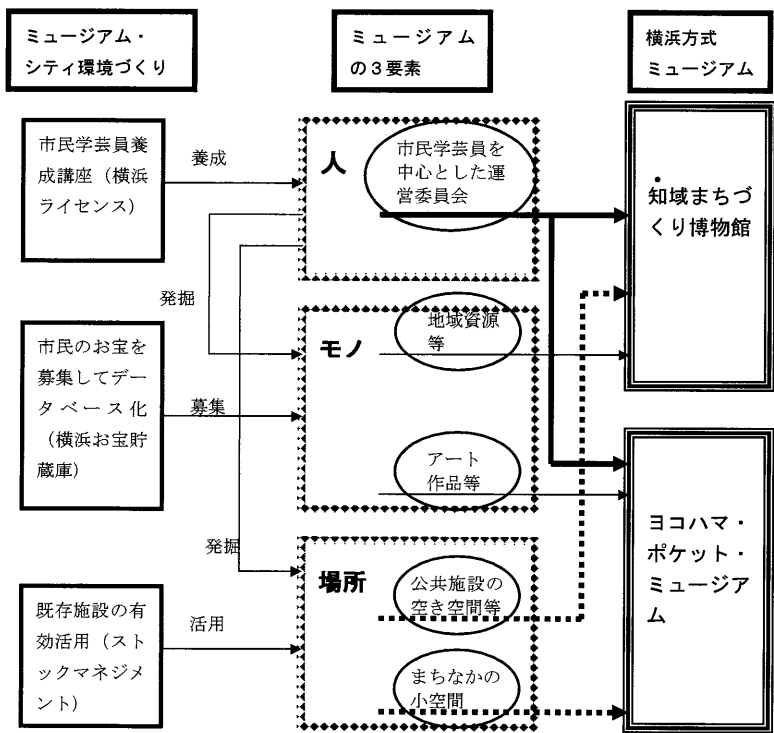
心とした「民」の力であるが、当初は行政に具体的モデルを提示していく役割が求められる。当検討チームは、これまでにない、新しい形の「横浜方式ミュージアム」の展開と、これを「人、モノ、場所」の側面から支える「ミュージアム・シティ環

境づくり」の2つのモデル事業を提案することとした(図1参照)。(1)横浜方式ミュージアムの展開
 横浜方式ミュージアムとは、市民主体による企画・運営、ストックマネジメント※①による短期整備、低

経費といった特徴を持つ「非成長・非拡大」の時代における、持続可能なミュージアムのモデルである(図2参照)。
 今回の提案では、ミュージアムの機能別に①知域まちづくり博物館※②と③ヨコハマ・ポケット・ミュージアムの2種類に分類した。

資源に関する学習・研究成果を発信する場をつくり、地域のまちづくりを考えるきっかけとしていく。設置場所は、既存施設の有効活用により生み出す。
 具体的には、(a)歴史を生かしたまちづくり、(b)地域の自然環境、(c)まちの景観など、地域の夢を形にするための企画をテーマとする。

図-1 ミュージアム・シティ・ヨコハマ体系図



①地域の夢を形にするミュージアムー知域まちづくり博物館ー
 横浜のような大都市では、地域のコミュニティづくりが大きな課題となっている。また近年、地域の魅力をテーマにした市民活動が活発に行われるようになったが、情報発信の場の不足等により、成果が地域住民に共有されていない。
 こうした現状を乗り越え、魅力ある地域のまちづくりを進めるミュージアムが「知域まちづくり博物館」である。地域住民が事業主体となり、地域

②まちをミュージアムにするーヨコハマ・ポケット・ミュージアムー知域まちづくり博物館が、「まち(の資源)を展示する」ものとするなら、「まちを展示スペースに変える」のが、ヨコハマ・ポケット・ミュージアム(以下ポケット・ミュージアム)である。ポケットとはまちなかの小スペースを表し、いくつかのポケットをつないで歩くことにより展示を楽しむことができる。
 ポケット・ミュージアムでは、工事現場の防護壁や駅の片隅など、日常のあらゆる空間を展示スペースにする。そこに作品を展示することにより、「まち」全体がミュージアムに変わり、「まち」に回遊性が生まれる。また、見せ方や展示方法の工夫に市民が主体的に取り組むことに

より、まちづくりへの参加の場がある。

(2) ミュージアム・シティ環境づくり

① コレクションのストックーお宝貯蔵庫

350万人横浜市民の中には、貴重な品や、ユニークなコレクションを保有している人が多数存在すると推測される。実際、市の関連部署には多くの市民が「お宝」「コレクション」の寄贈を持ちかけるが、管理経費などの問題もあり、実際に寄贈を受けるのはその一部である。

この潜在的な魅力資源（学術的、経済的価値を有していないものを含む）を市民全体で共有し、活用していくための環境づくりがMCYづくりには欠かせない。しかし、全てのコレクションを市で購入し、保管するのは不可能である。そこで、市民所有の「お宝」「コレクション」をデータベース化し、ホームページ上で公開する。これが「横浜お宝貯蔵庫」で、横浜方式ミュージアムの展示品や学校教育の場等における利用への貸し出しを想定している。

② ミュージアムを支える人づくり・ネットワークづくり

MCYづくりにおいて最も重要なのは、自ら活動したいという意欲を持ち、横浜方式ミュージアムの企画・運営に携わる人、すなわち市民学芸員の育成である。当面は、市が主体となって養成講座を開催し、修

了者に市民学芸員「横浜ライセンス」※③をレベルに応じて段階的に発行するなど参加者の動機付けを行う。

また、シンポジウムなど交流イベントの開催などにより、MCYづくりに関係する市民同士のネットワーク形成も同時に行う。

③ MCYづくりの効果

MCYづくりの推進により「横浜方式ミュージアム」が市内各地に生まれ、鑑賞の場が増え、住民が身近な「まち」を楽しむようになるが、効果はそれにとどまらない。

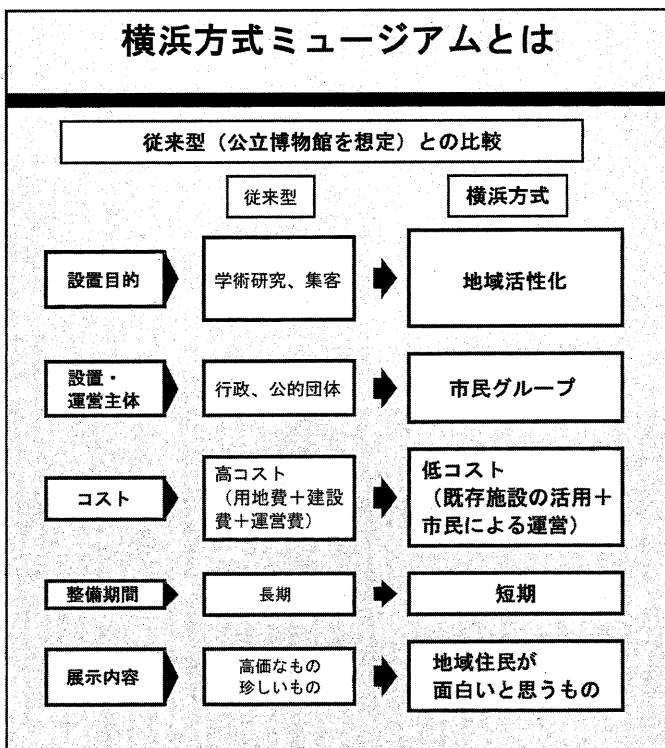
(1) 鑑賞の場から参加の場へ

MCYづくりによりミュージアムは、市民にとって鑑賞の場（行政から見れば集客の場）から、参加の場へと姿を変えることになる。参加には、鑑賞のほか企画・運営・学習・発信・運営・交流などの要素がある。

市内どこでも実施可能であり、市民誰でも参加可能である横浜方式ミュージアムの展開は、市民がまちづくりに参加する機会を増加させるものである。

(2) ミュージアムがまちを変える

図-2



横浜方式ミュージアムは、従来のミュージアムとは異なり一つの建物の中にすべてが集約される事はない。例えば、展示場所は地域の空きスペースであるし、学芸員・スタッフは地域住民である。コレクションの保管場所は、個人宅や学校、自治会の倉庫であり、ミュージアムショップは地域の商店街である。観客も地域の住民が中心である。つまり、ミュージアムを中心として地域に新しいコミュニティがつけられることになる。

(3) 多様な魅力を持つ都市ヨコハマの実現

この事業は、当初は地域の活性化につながる、地域住民の満足度を高めるものの、他地域・他都市からの集客に直結するものではないだろう。しかし、市内各所で個性的な活動が継続的に展開されることにより、将来「ミュージアム・シティ・ヨコハマ」と呼ばれる日が訪れ、魅力あるオンリーワン都市ヨコハマが形成されると当検討チームは確信している。

〈文責：新谷雄一〉

※①MCYにおけるストックマネジメントとは、公有財産・民間施設空きスペースなどの有効活用のことである。
 ※②「知域まちづくり博物館」とは地域を知るといふ意味で名づけた当検討チームによる造語である。
 ※③市民の自発的な公益的の市民活動にかかわる一定の意欲・知識・技術を認定し、市民活動の推進を図るために市が発行するライセンス。(平成14年度アントレプレナーシップ制度により事業化)